当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。　　Copyrighted materials of the authors.

AA 研共同利用・共同研究課題

「多元的想像・動態的現実としての「華人」をめぐる研究」

平成 25 年度第 2 回研究会(通算第 8 回目)

日時: 平成 25 年 7 月 29 日(月) 午後 1 時 30 分～午後 6 時

場所: 本郷サテライト 5F セミナー室

■研究会プログラム

【総合討論 1】 司会: 津田浩司 (AA 研共同研究員, 東京大学)

方法論に関する討議

【総合討論 2】 各共同研究員

執筆計画の検討

去る 5 月の通算第 7 回目の共同研究会を以て、全ての共同研究員が 2 回ずつの報告(初回: 話題提供、2 回目: ブラッシュアップ報告)を終え、早速草稿執筆に取り掛かることが確認されたが、その後のメーリングリストを通じた討議の過程で、本共同研究会が当初から掲げていた「行為中心的アプローチ」についての共有が、いまだ十全にはなされていなかったことが明るみに出た。そこで、執筆に取り掛かる前に急遽開催された今回通算第 8 回目の共同研究会では、まずプログラムの前半で、改めて方法論に関する集中討議に時間を割いた。各共同研究員には事前に、以下の 3 点の文献に目を通してもらった。

①櫻田涼子 (2011) 「社会現象としての「対象」をいかにして捉えるか : 行為中心的アプローチの可能性」, 本共同研究 2011 年度第 1 回共同研究会時提出のペーパー, 5pp.

②Mol, Annemarie (2006) *The Body Multiple: Ontology in Medical Practice*. Duke University Press Books, 216pp.

③福島真人(1998) 「差異の工学—民族の構築学への素描」, 『東南アジア研究』35(4): 898-913.

①は本共同研究会の問題意識とそれを乗り越えるための方向性(方法論)の再確認として、②は行為中心的アプローチを民族誌記述において実践したひとつのモデルとして、③は同方法論を「民族」において適用することを容易にすべく、「民族」を文脈依存的な差異の場に一旦引き戻して解体するという認識へ経由させるためのものとして、それぞれ提示した。こうして議論の前提を共有した上で、「行為中心的アプローチ」の方法論的有用性と限界を、

具体的に確認していった。

また、「華人」という所与の実体を想定するところから議論を始めるのではなく、いつどのような事象においてどのような人々がいかなる「華人」として(結果的に)立ち現れるのかを明らかにすることに主眼を置く、という本共同研究会の趣旨からして、この研究会は、華人という(実体的)対象によって結びつくものでは決してなく、あくまでも方法論の共通性を核として、諸々の社会的文脈の過程で現成される「華人」なるものをそれぞれ記述するものとしてある、という点についても改めて確認した。

プログラム後半は、各共同研究員が持参した執筆計画(うち１名は、研究会欠席のため事前提出)の概要をもとに、方法論上・記述上の問題を中心に活発な議論を行った。各共同研究員が提示した執筆計画のタイトルを以下に列記する。

・津田「インドネシアの国家英雄、ジョン・リー: 喚起される「華人」像」
・市川「「パプアニューギニア華人」とは誰か？: 複合的な対面状況におけるサブ・エスニック・アイデンティティの認定」
・北村「在オランダ移民グループとしてのインドネシア華人のエスニシティ」
・黄　「上座仏教を実践するマレーシア人仏教徒、それとも「華人」」
・玉置「タイのある「華人廟」の創出」
・奈倉「「華」、「僑」の多元的想像・動態的現実: あるミャンマー帰国華僑のライフヒストリーからの考察」
・伏木「シンガポール陰暦７月のスペクタクル化する儀礼: ヘリテイジの構築とその戦略」
・横田「グローバリゼーションの花嫁: 結婚の国際移動」
・櫻田「〈美しい過去〉をめぐる言説: マレー半島の華人とコピティアムと故郷をめぐる集合的記憶」

なお、これらはいずれも仮題であり、また議論の結果若干方向性を変える可能性があるものも含まれてはいるが、これをもとに年明けに開催予定の合評会を目途に、各自草稿執筆に取り掛かることが確認された。

(文責: 津田)